



遊道樂歩 (雜感)



少し覚悟がいる社会

長野 修二



目次

台風15号は予想外の被害をこの県にもたらしています。

そういう我が家も棟板金のひとつが吹き飛んで隣家の庭先に落下するという損害が発生しました。

外壁や屋根の塗装をおこない同時にメンテナンスをしていましたが、それでも破損してしまいました。

今後、屋根全体の点検と補修をおこなうことになりますが、これを書いている時点では業者さんのスケジュールは未定です。

もっとも、吹き飛んだ棟板金は、塗装をした業者さんがすぐにかけつけてくれて仮止めをおこなってくれていますが、隣近所に状況を報告していますからできればやく屋根全体の点検と補修をしたいところです。

棟板金でも部材に木が使われており、しかも長さが3メートルほどで重量がありますからガラス窓を破って室内に飛び込めば、人に大けがをさせることになります。

物損であれば補修などすることで治すことができますが、人けがをさせてしまうことになれば、天災といえど人間として心に重くのしかかるることは間違ひありません。

すぐに補修したいところですが、被災地では、被害の大きさから私の家ののような状況ではないようです。

住むことすらままならないからです。

その点でいえば、雨漏りもせず自宅に住めているだけありがたいです。

そろそろこの地でもなにか大きな災害があるだろうと予測（過去に雑感で書いていますが）していましたから日常的に少しづつ備蓄をしてきましたが、今度の災害で当地において電気を含めたトラブルはなく備蓄を取り崩すこともありませんでした。

他方、多くのトラブルをまじかにみていると、相当な覚悟が必要な時代になったと、判断できました。

平成時代から続く自然の猛威を知るにつけ、この国では災害時における自らの立ち位置を決めておくことが重要になってくるのかもわかりません。

今度の災害でもし我が家が家の屋根が飛んでいたらどのような行動をしていかたシミュレーションしてみました。

私は故郷（福岡）を捨てて東京へ出てきた身ですからあまり土地に執着がないタイプでしょうか。

この地も建売住宅の抽選に当たったから住んでいるもので気にいってはいますが、選び抜いた土地ではありません。

また、屋根が飛んだりした場合、住宅は雨漏りの影響で使用できなくなることも多いと思われますから、自宅を捨てる（取り壊し）ことも考えています。

私の性格に起因しますが、物事にあまり執着しないタイプで、そもそも長い時間をかけて自宅を復活させる気力がないタイプです。

しかも、子供たちがいなくなっているので大きな家も必要ありません。

私の性格では、おそらくこの地を捨て子供たちが住む場所に新たな生活拠点をみつけることになるでしょう。

それくらいの覚悟が必要になってきた時代かもわかりません。

身近な土地に起こった災害をみていると災害後の自らの立ち位置を決めておくことが、

これから時代、とくに必要ではないかと思います。

私は行政などを頼ることも苦手ですし、まわりの人たちに迷惑をかけそうなので可能な限り自宅を捨てることが最良な方法ではないかと感じています。

もっとも、一人暮らしでその場を動けない人たちや被災地で仕事（自営、農業、漁業など）をすることで生活基盤を築いている人たち、あるいは若い人たちに行政や国は多くの支援を集中してほしいと考えています。

国や行政機関は、このような前提で苦労をしている人たちをささえるのが真の姿でしょう。

これからも台風15号以上の災害は必ずくるはずです。

住み慣れた土地が心地よいことはわかりますが、被災者全体を眺めて復興の優先順位を自ら感じることも人として大切なことかもわかりません。

国や行政は、選別的（差別的）な支援をおこなうことなどできません。

災害復興の優先順位を選択できるのはあくまで個人です。

生活するための事情は人それぞれ違うでしょうから、だからこそ、災害に合う前に次の生活をどのように選択するかということを日々シミュレーションしておくことが一人一人に求められている時代ではないでしょうか。

今日も屋根の業者さんと連絡を取りましたが、多くの工事依頼にてんてこ舞いのようです。

こちらもあせっていますが、このような状況のときほど相手を思いやりゆとりをもって対応してあげることを心がけています。

損害保険会社の対応もらちがあきませんが、このような状況では致し方ないと、こちらも時が解決してくれるだろうと、相手を急かさず待っている状況です。

被災地の復興が数年から数十年かかるということが、少しあわってきただよな気がします。

今、強い風だけは吹かないでというのが本当の心境でしょうか。

自然災害というものは、普段の日常生活を一瞬にして崩壊させるということを心のどこかに刻んでおくとともに、自らの立ち位置も少し覚悟しておきたいものです。

少し覚悟がいる社会

著 長野修二

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
